
九十九奇譚

コウヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

九十九奇譚

【ZPDF】

Z0263U

【作者名】

コウヤ

【あらすじ】

見える少女と見えない少年の妖異幻怪な物語。

八重市緋知町。

水が清いことで有名な伊陽連山の一つである緋知山の麓に沿つて
いる町だ。

山の東端は緩やかなコの字型を描いており、その両端にはそれぞ
れ深鎧寺と逸神神社という寺院仏閣がある。

双方は昔から地元に親しみ、時には暗がりに住む者達から町を護
つてきた歴史を持つていた。

だがそんな徳高い寺の、住職の息子として生まれた水科晃郎が怪
異を目撃したのは、十七年生きて来た中でたつたの一度だった。

小学校低学年くの幼い時分だったので所々記憶は曖昧にぼやけて
いるが、夏だったように晃郎には思える。蒸し暑い日だった。

黒の強い灰色の雲が分厚く天を覆っている。

今にも降り出しそうな低くなつた空の下で、晃郎は仲の良い女
の子と田圃の畔を足早に歩いていた。

視線は下を向いている。その先には白い蛙が不規則なタイミング
で跳ねており、距離が離れると止まるし触れようとすると逃げてしまつ。

どこか愛嬌の感じられる白をはしゃぎながら追つていた。

一人はただ小さな雨蛙の背を追つて歩く。

それからしばらくして遠くに雷が落ちた。

導くように跳ねるだけだった蛙は驚いたのか、不意に進路を大き
く右に切る。

すると意外にもそれまで静かだった女の子は消えてしまった蛙を
追つて草むらに踏み入つた。だが丁度隠れていた畔の端を踏んで
しまつたようで、濡れた雑草に滑つた女の子は傾斜を転がつていく。

晃郎はぎょつとして畔を下りようとするが、「だいじょうぶ」と下から呼び止められた。

「ケガしない?」

「していないよ」

幸い草で肌を切ることも石で頭を打つこともなかつたようだ。女の子はすぐに立ち上がりて自分の失敗を照れ臭そうにしながら頬についた泥を拭つていた。色素の薄い髪にもベッタリと泥がついている。

小さな白い手の甲に頬の泥が移るのを見ていると、女の子は唐突に動作を止めた。停止ボタンを押したように不自然なまま固まる。よく見ると額にびっしりと玉の汗が浮いており、晃郎には痛みを耐えているように見えた。

「ねえ、どうしたの? やっぱりケガして」

その言葉の先を雷鳴が遮る。

間近で聞く打ち上げ花火よりも大きな音は空気と地面と、晃郎の体を揺らした。

近くに落ちたなあ。

雨の多い地域では茶飯事の出来事なので呑気に構えながら畔を滑り降りた。

少し転げそうになりながら女の子の傍に着地し顔を覗き込む。

「大丈夫? 帰れる? オトナよんにこようか?」

雷を先駆けにすぐ激しい雨が降り始める。

経験からそれを知っているので黙する女の子を揺すつて急かす。するとようやく女の子は顔を上げて目を合わせ 晃郎を思い切り突き飛ばした。

尻もちをついた晃郎を泥と草が柔らかく受け止める。咄嗟に地面に突いた手の平には鋭い痛みを感じた。

だが晃郎には突然の行動の方がショックで呆然と女の子を見上げる。すると実に冷めた、それでいて力強い目が返る。暗い空の下で奇妙に光つて見えた。

嫌われたのかと思うと涙が溢れてぼやつと視界が歪む。

そのとき畔に降るように下りて来た視界の右端に映る真っ黒な大きな靄は、涙が何かを量しているのだと思っていた。

黒いゴミ袋だろうか。風に舞うように留まっている。

目を擦つて改めて見た時も靄はハッキリと、ぼんやりしていた。アレは何だろう。

女の子を窺うと晃郎からすっかり視線を外してそれを睨んでいる。「ねえ、アレなあに？」

ビクビクしながら女の子に尋ねる。

女の子は無視する。というよりも聞こえていないようだ。歯の根も合わないほど震えている。

なぜ怖いのか分からぬけどこのままでは可哀想だ。

晃郎は涙をすすつて立ち上がり畔を上つて黒い靄と向き合つ。とりあえず追い払つてしまおう。

「ダメ！ 近づかないで！」

「大丈夫だよ」

靄は近くで見ると更に大きい。

ヒーロー番組に出てくる怪物よりも大きいようで、晃郎が「あつち行けよ」と言つと瞳つように体を揺らした。更に膨れ上がる。

その巨大さに追い払う気持ちはすっかり萎えてしまい 代わりに湧き上がつたのは胸を撫るような興奮だった。少年が恐竜に思いを馳せるように憧れを抱いたのだ。

記憶の中ではただの暗い不気味な靄は、幼い晃郎には違う何かに見えていたのかもしれない。

靄に向かつて手を伸ばす。

指先が靄に触れるとき痛んだ髪のような感触で そこで記憶は途切れている。

これが水科晃郎が見て触つて体験したと胸を張れる唯一の怪異譚であり、それ以降は一切奇妙な物を見るることはなかつた。

深鉢寺、本堂。

晃郎は黒い法衣姿で錫杖を揺らし鈴のよう鳴らしながら読経をする。

声の調子は年配の僧侶が唱える物には及ばないが高校生にしては低く落ち着いた沁み入るような音をしている。

目の前にいる学生服を着た少女は目を閉じて手を合わせ一心に耳を傾けている様子だつた。少し離れた場所に母親が待機しており、こちらは期待を込めた眼差しで晃郎と少女を見つめている。だが晃郎は決して期待に添うことが出来ない自分を知っているので居心地が悪かった。

数分後に経は読み終わり、晃郎は静かに一礼をして嘘を口にした。

「これで悪い物は取り除かれました。ご安心ください」

偽りと知らない親子は希望の光が差したような表情をして深々と頭を下げた。

晃郎はおおむね「実直そう」と評価される笑みを浮かべながら頷いてその確信を強めるよつ促す。

もう心配はない、悪靈は祓われたのだ、と。勿論嘘だが。謝礼として茶色の封筒が差し出される。苦い氣分が口内に広がり思わず顔を顰めてしまい、慌てて合掌して頭を下げて隠した。

何回も礼を言う二人に止めてくれと半ば本気で制しながら、本堂を出て門から続く石段の下まで送る。

「帰り道にはお気を付けて」

二人はまた深く頭を下げてから橙色の緩やかな坂道を歩いていった。

疲れた。

晃郎はその姿が完全に見えなくなるまで待つてから凝り固まった

両肩を回し石段を引き返す。

重荷から解放された爽快感と柔らかな疲労が全身を巡っている。このまま休めるのなら素晴らしい睡眠を取ることが出来るだろうが残念なことに仕事はまだ終わらない。

桜の花びらが散り始めているので境内には色あせたピンク色が大量に落ちている。石畳に張り付く前に掃除しなければならない。憎たらしい、と目前を横切った花弁を掴んでくしゃくしゃにし、仕事とその原因を作っている父親への恨みを花弁一枚分だけ晴らした。

晃郎は最近妙に寺を空けがちの父親に代わり、一人だけ居る僧侶と一緒に寺の管理をしている。

経は読めるが得度という出家の儀式のみしか受けでおらず、修行をしていない晃郎は本来ならば仕事に関わってはいけないのだろう。だが人手が圧倒的に足りない。

檀家の数も少ない貧乏寺では人を増やすことも出来ず一人で必死に仕事を捌いている状態だ。

行事、法要、葬儀、供養、お祓い、相談、その他。晃郎は後ろ三つを受け持っている。これが結構数が多い。

そして当然、寺に頼る者と言えば靈的な物件が大半なのだが、無能力なので何が何だか全く分からぬ。

そんな見えも感じもしない人間である晃郎には荷が勝ちすぎるのでお祓いに関しては靈感があると自称している僧侶が担当していた。

しかしながらある日突然任されることになる。

お祓いは晃郎くんに任せていいでどうか?

僧は一瞬言葉に詰まる様子を見せて「ほぼ全員が心因的な物だから」と苦笑いをした。

別に能無しでも構わないのかとその時は意気込んで仕事に就いたが、これが非常に精神を削り取る。

靈的な物の仕業じやないと否定してはいけない。

彼らが望むのは良い聞き手であり、形式的なお祓いである。否定する者は不要だ。

断れば寺の評判と収入が逃げて行く。相手も切羽詰まつて妙な詐欺師に引っ掛かるかもしれない。双方の利益を重視して晃郎は嘘を吐く。

互いが幸せになる嘘だが先程のような親子を見ると罪悪感は拭えない。

「これならホンモノさんが来た方がまだましかもしれない。

寧ろ来てくれると嬉しい。そもそも最初はごく稀に来るというホンモノが見たくて仕事を受けたのだ。

だが現実はそう上手くいらず、病院に行つた方が建設的な人々の相手をしている。拠り所を与えるという点では本来寺の役目として正しいが晃郎は今の仕事が好きではなかった。

錫杖を置いて竹箒を持ち替えた晃郎は、時折飛び掛かつて来る柴犬を躊躇しながら石畳を削り取る心意気で花弁を集め。

終わる頃には辺りは薄暗くなっていた。東の空はほんのり橙を残しているが、この場所は夜に向かつてひたすら闇を濃くするだけだ。花弁の山に躍りかかるうとしていた柴犬を阻止して愚痴を言う。

「おうハチ公、今日も日が暮れたぞ。不健全な高校生活だ」

「ムサシですよ」

はて犬が喋った、と晃郎は尾を振る柴犬と目線を合わせて首を傾げる。

次いで聞こえた「ふざけないでください」という声が思いの外苛立ちを含んでいたので背筋を正し、柴犬ムサシの横に立つ僧侶に愛想笑いを送った。

晃郎と同じ黒い法衣は心なしか草臥れて見える。

「お帰り真明さん」

真明は今年二十九になる僧侶だ。

渋い空気のせいで年齢より老けている。晃郎が高校一年の時にこ

の深鎌寺に訪れ、その頃から放浪を始めた父親の仕事の穴を埋めた。どう言つ繋がりがあつてこの貧乏寺に来たのかさっぱりだが信頼を寄せるに足る人柄と仕事ぶりだ。

最近は忙しさのせいで更に老けて見える。真明が後ろ髪に一本白

髪を発見して落ち込んでいる場面を目撃した時には、晃郎は酷く不憫な思いに駆られた。

真明は僅かに目尻をひくりとさせて自らの呼び方を訂正する。

「……真明です。ただいま戻りました晃郎くん。ムサシは吠えましたか？」

「いえ全く。お勤めお疲れ様です」

「手伝いましょう」

真明は塵取りを晃郎の手からもぎ取り花弁の山にブスリと突き刺した。

竹箒の補助を必要としないでスコップのようにならぬ乱暴に使い、「ミ袋

に入れていく。

「えらく腹が立つてますねえ」

「最後に回った檀家の方が私では駄目だと文句……いや、お願ひされましてね。

修行が足らんのです。お気になさらず、」

「親父に連絡しましょうか。そろそろ俺もあの放蕩野郎に怒鳴りたいし」

「放蕩などではありますよ。便りがないのは誠玄様がお忙しいからでしょう」

真明はそう言つてから三つある「ミ袋を全部担いで石段を下りて行つてしまつた。

晃郎は父親が今どこで何をしているか知らない。戻つて来るたびに修行や金策などと言い訳をしているが本當かどうかは怪しい。

虫でも飛んでいるのか、何かを追つて走りまわるムサシをぼつかと眺めているとすぐに真明は帰つて来て正体不明の笑みを浮かべた。

「晃郎くん。瑞代さんがありましたよ」

「いや、報告しなくてもいつも居るでしょう。アイツは「そうですか？」

すつ呆けながらムサシを撫でて寺内に入つて行く。

明らかに勘違いしている様子だが訂正するのは面倒だ。

こいつやつて顔を見に行く行動も勘違いを助長させるのだからと晃郎は思いつつ、石段の半ばにある踊り場まで下りる。

そこで屈むと木に阻まれることなく道路の向こう側に横向きの鳥居が見える。その下では巫女姿の少女が竹箒を懸命に動かしていた。真っ白な肌が暗い中で映えている。

「瑞」

名を呼び終える前に少女は晃郎に冷たい視線を向けた。

そして軽く首を傾いで振り返ることもせず鳥居の中に引っ込んでいき、晃郎は片手を上げたまま固まるのだった。

雨蓋瑞代。
あまぶたみずしろ

晃郎が目撃したと胸を張れる怪異の生き証人であり、あの冷たい対応でも一応晃郎の親友である。

恐怖と自戒

鳥居の前に延々と舞い落ちる桜を黙々と掃いていた瑞代は、ふと嘶きを聞いて顔を上げた。

見ると、森の茂みで白い齧^{たてがみ}と銀鼠の体色を持つ馬のような生き物が後ろ脚で立ち上がり、目一杯首を伸ばして木の枝に引っ掛けた何かに噛みついている。

引っ掛けた何かはよくよく田を凝らすとそれは黒っぽい動物のようであり、更に目を凝らすと毛が抜けた猿のような物だと分かった。

額には一本の角が生えている。雑鬼だらう。

必死で逃れようとする雑鬼を馬は軽々引き下ろし、一口で食べてしまった。

瑞代が思わず「おえっ」と齒くと馬は顔をじりじり向けて歯を剥き出しにする。

「駒^{こま}、お腹壊すよ」

駒と呼ばれた馬は抗議するように首を振つて鳥居の奥に行つてしまつた。

仕方がないヤツだと瑞代も首を振つて再び掃除に取りかかるが、今度は足音を聞いて中断する。

精が出ますね、瑞代さん。こんばんは

草臥れた法衣を着る僧侶が、茶色混じりの桜色をしたゴミ袋を担いでいる。彼は向かいにある深鎌寺に一年前から居る僧侶だ。この頃は忙しいのか身なりが疎かになつてあり、髪もあちこち癖毛が立つていて。

「こんばんは真明さん。それ全部桜ですか？」

「真明です。全部桜ですよ。境内にある大桜も散り始めましたから袋を指定のごみ収集場所に置いた真明は一礼して道を挟んだ向か

いにある寺に戻つて行く。石段に差し掛かつたとき足元に半透明のトカゲが纏わりつき少し体勢を崩していた。

瑞代は駒を呼んで退治させよつか思案したが、真明が足踏みするとトカゲは煙のようになふる。

しかしながら本人は何を踏んだかまでは分かつてないようで首を傾げていた。

この町は古くから豊かな自然を保つてゐるからか、妙な物が多い。それに比例して感覚が鋭い人が多くいるが、大抵は波長が合つたり、向こうから姿を見せようとしない限り真明のように「見える気がする」くらいで、瑞代ほどハツキリ見える人はあまり居ない。

不意に強く吹いた夜風の中に冷たいものが混じる。

夕月の浮かんだ空を仰ぐと翼を持つた大きな影が山の方へ飛んでいた。近頃はあんな力のある者まで住みついている。

悪いものじやないといいけど、と瑞代は竹箒で落ちていたゴミを引き寄せ、ついでに尾が一本ある鼠を強く払つた。呆氣なく霧散する。

実体を持たないような小物は決して生身の人間に敵わない。惑わされ引きずられることがあるが、強く意志を持つていれば決して負けはないのだ。

しかし先の大きな翼の影などは違う。

「あれ、駒。機嫌治したの？」

何時の間にか傍にいた駒が鼠のような尻尾を寺の方に向け「コウロウ」と示した。

石段の半ばで晃郎が屈むようにして瑞代を見ている。何が楽しいのか晃郎はいつも笑顔か、それに類する柔軟な顔をしている。

まず瑞代はハツとして晃郎の周辺を探り 何も居ない事に気付いて視線に陰を含ませた。

まだだ。

すぐさま鳥居に引っ込んだ瑞代は神社に続く蛇行した坂道から脇に入り、山に漂つてゐる小物妖魔をひつ捕まえてその背に筆ペンで

「式」と書く。

取つて返すと晃郎は肩を落として石段を上っているところだった。

その背を指差して鷺掴んだままの一つ目のイタチに命じる。

「あの石段を上っている人間を守るように」

行け、と放つと脱兎の如く走つて行つた。

瑞代はこうやつていつも晃郎に守りをつけているのだが、どうしたことが数日で自然消滅してしまったのが悩みの種だった。

「力ホゴ！ 力ホゴ！」

「駒うるさい。引っ込んで」

駒が言うように過保護なのかもしれない。

暗がりに住む者達は瑞代のような力を持つ人間を積極的に狙うので、何の力もない晃郎は危ない場所に近付いたり、余程不運でない限りは危険が無いのだ。

だけどそれでも。

瑞代は掃除が面倒になつて集めた桜を竹箒で散らし住居を兼ねている社務所に引き返す。

（なんで消えるんだろう。ムサシが食べてるとか？）

忠犬ならぬ靈犬ハチ公と瑞代が密かに呼んでいる柴犬は雑鬼を見つけると嬉々として襲い掛かっている。

しかし駒とは違い真っ当な犬なので食べているとは考え難い。

それに、守りと使役者は僅かながら繋がりがあるので突然消失すれば幾ら未熟者の瑞代でも気付く。

（じわじわと薄くなるように消えてるんだろうか）

それなら違和感を感じないかもしないが、ゆっくりと消える原因が思い浮かない。真明が何かしているとも思えない。

瑞代は頭を抱えて唇を噛んだ。

「分からん……」

「ソモソモマモルヒツヨウガナイ」

「今日はよく喋るね」

そもそも、と真似て言い返す。

「駒も何かなのかハツキリしてよ。妖怪？」

問い合わせると駒は途端にダンマリを決め込み畠をパカパカ駆けてどこかに行ってしまった。

危ない物ではないのだろうが得体が知れない。

尤も、晃郎に言わせれば瑞代も得体が知れないのだという。畠に話し掛けている場面を何度も目撃されている。

社務所には誰もおらず、吸い込まれそうなほど静かで真つ暗だ。明かりを点けても冷たい雰囲気は消えない。

慣れているので気にはならない。

普段着に着替え、念の為に一つ目イタチの繋がりを確認するとしつかり返事があった。

(ニンゲンハコンビニメシヲクツテイルゾ！ ジツニマズソウター！)
(そんな報告要らないから)

小さな妖魔だと知能が低いのかたまに命令以外の事をする。以前の妖魚などは一緒に風呂に入つて聞きたくもない実況をした。

これではストーカー染みている。

だが賢しい妖魔だとそれはそれで厄介だ。

過保護を止めてしまえばいいとも思うが その刹那に昔の恐怖

が記憶の下層からジツと瑞代を見上げてくる。

澁のようになじみの濁つた視線はあの時から瑞代の心臓にこびり付いて離れないのだ。

逸神神社に生まれた雨蓋瑞代は、五歳の頃にはハツキリ怪異を目いつみに映すようになった。

空を見上げると二本首の鳥が舞い、地面を見下げるに雜鬼たちが徘徊していると言つた具合に生き物とも何ともつかない者達が視界に入り込む。

初めは恐怖心で神社の神域に籠つたが、段々と慣れていき、いつ

しか当然の風景になつていった。

違う人には、あまり言つてはいけないよ。

見える側にいる両親は「違う人」と言つて瑞代達と普通の人を区別していた。

自戒しようと意味だつたのだろう。私たちは変な物達を引き寄せてしまふので、違う人を巻き込んではいけないと。

雨蓋一家は一線を引いて生活をし、今もそうやって地域の中で生活を続けている。

それでも当時の瑞代の目には両親と地元の大人たちはとても良い関係に映つていたし、実際そうだったのだろう。

だが年端もないか子供であつた瑞代はそんな穏やかな関係を築くことが困難で、妙に気を張つてしまい遂には見える力と引き換えのように友達を失つた。

その頃の駒はまだ形も光の球で喋れもしなかつたが、よく瑞代を励ましたのでそのお陰で寂しくはなかつた。

瑞代は近寄る努力も反発することもなく駒と過ごし、他の子達が公園で遊ぶ中で探検などに精を出していた。

そんなある日、いつもの通り一人でいると公園にいた一人の男子が寄つて来て、「あそぼ」と手を差し出して、男の子の手と笑う顔を交互に見詰めた瑞代は、何となくそつと手を重ねた。

それが晃郎との出会いだ。

晃郎が何を思つて除け者に近付いて来たのか現在に至るまで解明はされていない。訊いても本人は忘れてはいると言つので永遠にそのままだろう。

駒が居て寂しくないと言つても喋ることはできず、話し相手を得た瑞代は探検で見つけた場所や最近の出来事を一気に話した。そこで自分が会話を食えていたのだと知る。

瑞代の話を面白がつた晃郎は自分も探検すると言い出し、一緒に行動するうちに二人は誰よりも仲良くなつていく。

だが親友と呼べる程になつても瑞代は自分の見る世界を決して晃

郎に言いはしなかった。晃郎は「違う人」なのだと充分に理解していたからだ。

しかし転機が訪れる。

それは二人が小学校の三年生に進級した日だった。
一緒に下校している時に小物が道を塞いだので駒が追い払う。その様子を晃郎が目で追っていたのだ。

「今なにしたの？」

「……ううん、なにも！」

疑問にそうやつて答えはしたもの、瑞代は嬉しかった。
もしかしたら自分と同じかもしない。そうすれば隠す必要もない
くなるのでもっと仲良くなれる。

早く見えないかと駒を晃郎の頭に置いたりしていると、多少なりとも能力が触発されたのか、駒を「ホタルだ」と言つこともしばしばあつた。見えるまであと少しに迫つてているように思えた。

そして、運命の日は足音も立てずにやつて来る。

その日は大雨を予感させる空模様で、恐ろしく天が低かつたのを瑞代は覚えている。

暗雲は針でちよつと突けば決壊しそうな危うい均衡で水を溜め込んでいるようだった。

「ふりそうだねー」

「ねー。どうする？　帰る？」

朝は昨晩の雨が嘘のように晴れていたのに、学校が終わると途端に今の空に変わってしまった。まるで早く帰れと促すようだ。いつもはいる雑鬼も妖魔も大雨を予感してか見渡す限りどこにもいない。駒は惑うように忙しく飛びまわつて瑞代の背中を突いていた。結構痛いので叩き落とす。

それらは明確な予兆と駒の警告だったが瑞代は察する事が出来なかつた。

「あつカエルだ！　色ヘンじやない？」

「え？　……ホントだ」

帰り道にのど真ん中に小さな白い蛙が座っている。体色に反した
真つ黒な瞳が一人を眺めるようにしていたが、すぐ回れ右をした。

晃郎が「にげちゃった」と残念そうに呟くと 聞こえたようこの

白い蛙は止まった。

あれは、じつちの生き物ではない。

「ミズシロちゃん、行こうよ」

「……うん。追っかけながら帰ろつか

何かおかしい。瑞代は考える。

晃郎は蛙が見えるのに駒の事を指摘しない。それは蛙が意図的に姿を見せているからだ。

どこか危ない所に導かれているのかとも考えたが、蛙は一人がいつも辿る帰り道を間違わずに進んでいる。なぜそんな事をするのか瑞代は分からず不気味に感じた。

白い蛙は一人を引率するように跳ねて行く。

痺れを切らした瑞代は駒に捕まえるように言つたが、駒は揺れるだけで何もしない。

そこで自分の手で捕まえようと決心する。しかし。

「あつ」

遠くに雷が落ちたとき慌てたように群の草むらに隠れてしまった。
思わず追つて一步踏み出と、平らだと予測していた地面は斜めになつており、濡れた草に足を取られてそのままバランスを崩して転げ落ちた。

駒がすかさず守つたので怪我は無かったが泥がベッタリと髪に顔にとくつ付き気持ち悪い。

蛙は、と茂みに立つ筈の由を探すも見つけることはできなかつた。

「ケガしていない?」

「していないよ」

一体何だったんだと理不尽を覚えるが、失敗を見られた氣恥かしさが勝つて俯く。

手の甲で泥を拭い 瑞代は田の端に黒い物を映してギクリと固まつた。

「ねえ、どうしたの？ やつぱりケガして……」

大きな雷鳴が空気を裂く。
空が白く発光し、畔の上に降り立つた強大な黒い影を一層浮き立たせる。

悪意を含んだ視線を感じたとき耳鳴りが脳みそを壊さんばかりに頭の中を搔き混ぜ、全身から冷や汗が吹き出した。

駒は激しく瑞代の周囲を旋回して威嚇していたが、アレに対して牽制を成し得られるとは到底思えない。

呼吸が無意識に早くなる。汗が目に浸み入るが強張つて瞬きすら出来ない。

逃げないと死んでしまう。食われてしまう。

生死の基準がまだ曖昧な年頃だつたが本能的に悟つてしまつた。

「シセン、アワセズ、ニゲル、ジュンビ」

初めて喋つた駒は駆け出す準備を促す。瑞代は額くかわりに生睡を飲み込んだ。

滑り降りる音を聞いて視線をずらすと、晃郎が瑞代を心配そうに覗き込んでくる。

畔に居てくれた方が引つ張つて逃げる時に都合が良かつたが、その優しい視線に勇気づけられた。

「だいじょうぶ？ 帰れる？ オトナよんてこようか？」

「コイツ、オイテク。エサラクレテヤレバタスカル」

畔の方を見ないように顔を上げる。晃郎を見る。

駒は瑞代を急かすが、瑞代は腹を括つた。

置いて逃げなどするものか。

力の限り晃郎を突き飛ばす。草むらに転ばせて少しでも影の視界から隠れるようにし、瑞代はあらゆる力を振り絞つて動きの悪い首を無理やり畔の方、影のいる向に巡らせた。

そこには大量の蟻が舞っているような黒い靄もやがあつた。

奥に何か酷く不吉な物が居る。初めて目にする、大物の妖魔だった。

(あなたの視線は力を持つから、逃げないのなら睨みなさい)

母の言葉を思い出して胆力の限り睨み付ける。靄は僅かに身を搖するが、それ以上の効果はない。

情けなく震える歯の根を噛み締めて睨み合いを続けていると、何を思ったのか晃郎が畔を上つていった。

「ダメ！ 近づかないで！」

制止の声を晃郎は軽くいなして靄の前に立つ。

なぜこのタイミングで見えてしまったのか。瑞代も畔に上がるうと思つも、体は恐怖で萎えてしまつている。

晃郎は、最初は向かっていく様子を見せた。だがすぐに圧倒されたように目を見開き、そして感嘆のような息を漏らして 手を伸ばす。

本人は気付いていないようだが突き飛ばしたとき手を切ったのか 血が滴つている。地面に落ちた赤い零を靄が動いて舐め取る。

靄は正体不明の体を揺らして嗤つたようだつた。靄に目を凝らすと黒の中に微かだが大きな口が見え、舌舐めずりをし、地獄の釜のように開いて小さな手を迎へようとしていた。

「やめて！ 食べないで！」

友達の危機に際してようやく体が動いた。

畔に上つて手近な石を投げつけると口は閉じたが、黒板を引っ搔くような嗤い声の後に突き出た獣の手が晃郎を掴む。『氣を失つた』晃郎はされるがままに引っ張られる。

瑞代は絶叫して醜悪な靄の手を払い落そと駆け寄り、手を伸ばした。

ミズシロ、と叫んだ駒が間に割り込み 光の球でしかなかつた体が色を持つた。

光を失い灰色味を帯び、縦横に引き延ばされ、芸術のよつに形作られていく。

白い靄が風に靡き、銀鼠の体毛は筋肉に沿つて波打ち、暗い空から降る僅かな光を反射して艶を帯びている。力強い四肢が伸び、黒い蹄が地面を搔く。

大きな馬に変化した駒は、驚いたように手を離した霧を後ろ脚で蹴り飛ばした。だが大して効いてはいないようだ。

「コマ、こげよう！」

追撃しようとする駒を制止する。

即座に身を翻した駒は晃郎を抱いて座りこむ瑞代を靄のような尻尾で拾い上げて背に乗せ疾走した。

景色は瞬く間に後ろに向かつて流れしていく。

振り返ると既に遠くなつた靄が追つてくる気配を見せたが、見計らつたように降り始めた天の底が抜けたような雨が真っ白な線を作り靄と瑞代達を遮断した。

無事に神社まで辿り着く。

そこで額を寄せあつて何事か話していた両親と晃郎の父親に事情を話し切つてから、瑞代も意識を失った。

「一人とも不運だつた。だけどよく生き残れたと思います。瑞代ちゃんが目を覚ましたら晃郎を助けてくれたお礼を言いたい。ただ 嘘われたのか元々育たないで枯れる芽だったのか、晃郎はもう見えてはいないようです」

晃郎の父、誠玄じょうげんが言った通り、晃郎は一度と瑞代と同じ世界を見ることは無かつた。

それから約十年が経つた。

晃郎は時々嬉しそうな顔で「覚えてる?」と瑞代にあの時の出来事を確認する。

その時の晃郎は怪異を見たと言つ稀有けいゆうな経験を誇るようであつたあの靄を望むようでもある。

その時の瑞代は罪を突き付けられているよつて苦い物を感じる。自分が関わらず、自然のまま緩やかに能力の成長を待てば、あの靄を見ることもなく、靄に触れることもなく、憧れを抱くことも無

かつただろう。

枯れる芽、と誠玄は言つてくれたが有り得ない事だ。

私は間接的に晃郎の何かを奪つてしまつた。

失つたもの求めめるように晃郎は暗がりに住む物達に興味を持つ

て いる。

全く見えはしないので関われないとは思うが、瑞代は自責の念も

あつてこれからも晃郎に守りを付け続けるのだらう。

微々たる異変

緋ひ知じ町まちといふのは緋知山を源流とする川に南北を分断されおり、その川から水路を引いて町の隅々まで小さな川のよつに広がつてゐるため水四里町とも言われたりする。

緋ではなく水を知るという語呂合せだがあながち間違つていな。それどころか水四里町の方がしつくりくる景観なので、観光客向けのパンフレットには随所に緋知ではなく水四里と書かれている。流れの川の名は水失みずつかせといつた。

こちらもまた雨量によつては氾濫する川としては矛盾した名称だが、幸いなことにそのまま呼ばれている。

早朝と言つには少し遅い頃、晃郎はその水失川に沿つて造られた土手を半ば眠氣でぼうつとした頭で辿つていた。

町は高地にあるので四月半ばに差し掛かつた現在も朝は冷え込む。渢をすすつて腕時計に目を遣ると八時十五分を示しており、晃郎は働くない脳内に「遅刻」の一文字を浮かべて、そのままの速度で登校を続ける。

晃郎の通う青ヶ橋高校は自宅から十五分緋知駅まで歩き、そこから電車で四十分揺られた所にある。

どう頑張ろうと完璧に遅刻であることは分かり切つてゐるため悟つた眼差しをしてみると、制服の胸ポケットが震えた。無視するが中々鳴り止まないので仕方なく取る。

「もしもし」

「おはよ。今どこ?」

瑞代みずよしだった。同じ高校だと言つた三十分前をつと先に行つて

しまつた瑞代からの電話だつた。

低く落ち着いた声で、喋る速度もゆつたりと余裕のある様子なので晃郎は時々田上の先輩と話すよつた気分になる。

「え、今は……」

緑が芽吹き始める緋知町を見渡して言つた。

「電車の中」

「どこでもいいけど、貸した現代社会のノート。今日授業あるからね」

「やっぱ忘れた！」

晃郎は間髪入れず通話を切つて今来た道を猛然と逆走する。

青ヶ橋高校の校訓は自由、自立、自律というフリーな三原則を基に成り立つている。

それが校風に反映されており、成績が上位であれば服装や髪色などの自由は黙認され、血の汗を流す努力で上位陣に食い込む晃郎の遅刻も見逃されることが多い。

涼しげな顔で学年一位を掠め取つて行く瑞代などさぞ優遇されるのだろうと思っていたが、どういうわけだか数人の教師からは受けが悪かつた。

特に晃郎がノートを借りた科目、現代社会の教員は何かと瑞代を目の敵にしている節があるので、忘れたなどと言あうものなら嬉々として攻撃してくるだろつ。

寺に着くと真明が作務衣姿で草むしりをしていた。頬に土が付いている。

晃郎を見ると手を止めて二ビルに口元を吊り上げた。深い渋みを感じさせるが本人は普通に微笑んでいるつもりのようだ。

「晃郎くん。悪心ですか？」

「サボりじゃないです。忘れ物。真明さん、今日は法要とか無いの？」

珍しい、と呟めると真明は楽しそうに肩を竦めてから草を「ミミ袋に放り込む。

「ありませんが、お風過ぎにお祓いを希望する人が来ます。いわくつきの品を持つてくるよつで」

「……本物？」

大体は偽物だからと晃郎に任せた仕事だ。多忙な真明が応対するといふことは、と瞳を輝かせると照れたように短髪を搔いた。

「何か特別なことが出来る訳でもありませんが」

「それでも全く駄目な俺より凄いじゃないですか。いいなー俺もちよつとは見てみたい」

羨ましさを隠さず言つと今度はキュッと厳しい表情に変わり、居住まいを正す。晃郎よりも僅かに背が低い真明だが、そうする」とで随分大きく威圧的に見えるから僧侶というものは不思議である。「晃郎くんはある意味、とても恵まれているんですよ。見えない方が良いことも沢山ある」

「例えば？」

「顔が玉でびっしり埋め尽くされた血まみれの死靈を見たときです。や、早く学校に行きなさい」

戒める為に言ったのだろうが、その時のこと思い出してか真明は顔の色を青くしてくる。そこに柴犬のムサシがやって来て真明の

後ろに向かつて激しく吼えた。

木陰にいた小鳥が面食らつたように大慌てで飛び去つて行く。

「うつ 噂をすれば！」

それ以上に真明は慌てた様子で、悲鳴のよつに言つて本堂に走つていった。良く分からぬが逃げたらしい、とその場で跳ねて宙を咬むムサシを見ながら晃郎はハツとする。

「電車の時間が！ 真明さん原付借りますよー！」

自室に置いてあるノートを引っ掴み取つて返し叫ぶ。

遠くに聞こえた「今日は使いませんからどうぞ」という声はいつも通りの調子だ。何かから無事逃げ切つたのだろうと晃郎は予想して再度駅に向けて出発し、無事に本数の少ない電車に乗ることに成功したのだった。

青ヶ橋高校は開校五十年の古い歴史を持つ学校だ。

歴史の長さに比例して所々汚いが、県の中心にあり、偏差値もそれなり、学校自体の評判も良い。田舎の県から脱出したいと願つている、都会に野心を持つ人間が割と多い。

ただ、近年スポーツにも力を入れ始めたためスポーツ推薦で入学する者も増えている。運動と勉強を両立できる者は少なく、学力はピンキリだ。

晃郎は前年まで問題児学級だったが三年に上ると同時に作られる、二つある特別進学学級の一つに放り込まれた。

普通のクラスは授業中でも微かにお喋りの音がするのだが特別進学クラスは全く無音だ。堅苦しそうにしている教師もいる程で、顔合わせの時は呼吸一つも気が抜けないと言った緊張感が漂つていた。晃郎はクラスメイトの無言の圧力を覚悟して三时限目の後半、三

年一組の教室に忍びに入る。

まず教卓を見る。タイミング良く教員は席を外していた。幸運を喜び、突き刺さる一瞬の視線たちを躱して、何食わぬ顔を装い席に着く。

ドア側の一一番後ろが晃郎の机だ。良く遅刻する晃郎への配慮として友人が仕組んでくれた席だった。

真隣、つまり一列目の一番後ろにその席割りの神様は両腕を伸ばして顔を机に伏せている。偏食で案山子のように細いが、それを除けば成長期を順調に過ごしたのだろうと思わせる身長で、小さな机はみつちりと友人の上半身で覆われていた。

息苦しいクラスでもやつて行けるのはこの友人のお蔭だと晃郎は思っている。自分と同じ問題児学級から上がつて来た人物であり、学力重視を体現する外見だ。

「おい月丘」と晃郎は萎びた野菜を友人に重ね合わせながら骨ばつた肩を揺する。

三回揺らしたところで月丘^(つきおか)陽太は大義^(よつけ)そうに顔を上げ、「うるせえ」と唸つて頭の位置を元に戻す。色を抜いた髪の毛より悪いように思えて小さく尋ねた。

「どうした？」

「遅れて来て、良かつたな」

脈絡のない低い返事に首を傾げる。

「なんでだよ」

「うう、腹が……」

「食中毒？ 大変だな」

「うるせえアホかお前は！」

冗談のつもりだったが陽太は目を剥いて怒鳴り、犬が吼えたよう

な音の余韻が教室に反響する。慌てて人差し指を口に当てるがそれ以上陽太は叫ばず体力を使い切ったかのように机に額を落とした。強烈な腹痛のようだ。

晃郎はこつそりと周囲を窺う。クラスメイトは黙々とノートに向かって勉強しているフリをしており無関心を装っていた。中には笑みを向ける者もいたがそれはほんの少数派だ。

特進クラスの弊害だ、と晃郎は思う。

真面目なのは良い事だが、それが極まって堅物に進化すると厄介な物で、自分の常識規範から外れている者には容赦ない侮蔑の視線を向けてくるのだ。大体のクラスメイトはヒヨコの様な頭の陽太や入学早々に停学事件を起こした晃郎などにあまり関わりたくないといふスタンスが基本だが、中には陰で口汚く罵る者もいる。

クラス替えをして急に強くなつた風当たりは勉強について行けるかという不安を発散しているというのが陽太の見解で、晃郎もそう思つことにしていた。人好きなので嫌われていると思うのは胃が痛む。

教師がいないのにシンと静まりかえつた室内に、問題児学級の馬鹿騒ぎを懐古しながら三時限目は終了した。結局教師は帰つて来なかつた。

「おい月丘。保健室行くか？ それともトイレか？」

陽太はあれ以来ピクリともしない。流石に心配になつて声を掛けると、陽太はヒヨイと顔を上げて眉を寄せた。

「ぶつ殺すぞ。殴られたんだよ」「おー生きてた。よかつたよかつた」

無事に回復した姿は何時もの通り不良で「ぶつ殺す」に反応して周囲の生徒が怯えたように肩を揺らす。

それよりも殴られたと言つたか。

「また喧嘩か。良くないな。ここは一つ大人になって黒染めしとけ
「喧嘩じゃない。テメエに言われたくないわボケ
「それなら何だよ。一方的に殴られた?」

「違う」

そう言つて目を伏せ、しばし黙り込む。外見から想像がつかない、思慮深い性格をしているのだ。だが短気もある。相反する二つをどうやって折り合いでいるのかが不思議だ。

「殴られたんだよ。誰かに。顔は見なかつた」

熟考の果てに出て来た言葉に晃郎は思い切り顔を顰めた。

「何だよそれ、通り魔か。もしかして遅れて云々ってそれか？ 何人が犠牲になつたんだ？」
「全つ然違う。七組の馬鹿が乱闘起こしたんだ」
「そこで何で通り魔に繋がんのか全く分からん」
「だから、今から説明するつて所だろうが！」

怒鳴つた陽太は腹を擦り少し表情を歪める。腹よりも短気ゆえに負担のかかる脳の血管を気にしろと晃郎は心の中で忠告した。

「何があつたわけでもないんだが、一限目の半ばくらいにいきなり妙な雰囲気になつてな。突然みんな苛々し始めたみてえで、俺も何だか腹が立つてた。そんな中で一時限目の最中にあつちの廊下が騒がしくなつて」

と、陽太は七組のある右の方向を指す。

「先生が見に行つたんだけど収まるど」いか尚更五月蠅くなつた。その上女子の悲鳴まで聞こえたもんだから、つい、気になつて見に行つたんだ

「首突つ込みに行つたんだな」

「誰が突つ込むか！……珍しいことにガリ勉共も何人か着いて来てたつけ。俺より前に出ようとしねえからそれもまた苛立つた。野郎の盾とか笑えんだる。まあ情けないことに廊下の先に既にできていた野次馬の壁を見て引き返して行つたな。俺は後ろから覗いたんだが真ん中付近で七組の奴らが暴れていて、それがどうも普通じゃないようだつた

「危ない感じつてこと?」

それには陽太は肯定せずに苦い顔を作つた。思いがけず痛い所を突いてしまつたらしいと思つた晃郎は、「それで？」と先を促す。

陽太は深く息を吐いた。言い辛そうな様子からここからが本題なのだろうと察せられる。

「よく考えてみりや他の奴らも変だつたんだ。誰も止めに入んねえし……俺も、おかしかつたと思つ。そつから記憶が飛んだ。殴られる直前まで覚えてねえんだ」

真剣な三白眼を正面目に見返す。すると一瞬ホッとしたように顔を緩めて、また厳しい表情に戻り続けた。

「腹を殴られて痛いつて感じた時に自分のいる場所が変わってんだよ。気が付けば喧嘩が近くなつてた。野次馬をかき分けて前に出てたらしい。慌てて教室に戻つたよ。自分が何仕出かそうとしてたのか分かんなくてな」

陽太は自分の手の平を見つめ握つて開くを繰り返す。そうやつて動作の正確さを確かめるようにしながら、手に不審を混じえた視線を向けている。

「後に聞いた話じゃ無関係な野次馬も何人かフラフラ入つて喧嘩に参加したんだと。乱闘参加者は揃つて停学らしい。危うく俺もそうなるところだ。結構いたからな、停学者がいる組の担任は緊急会議中」

教師がいない理由を知つて納得しながら晃郎は友人の様子を窺つ。動搖しているように見えた。

陽太は良識的な人間だ。理由なく喧嘩しに行こうとした自分の行動にショックを受けているのだろう。

「場の空気が悪かったんだろ。気にすんな」

気休めでも、と寺に相談しにくる人に向ける和らげた声を掛ける。「キモイ」と辛辣だつたが深かつた眉間の皺が浅くなつた。

晃郎は休み時間になつても囁くような声しかしない教室を見渡す。棘のある雰囲気は脱したようだがどこかそわそわした様子を見せる者が多い。そう言うと陽太は鼻で笑つた。

「あんな大がかりな喧嘩は俺らの入学式以来だからな。優等生ぶつてるが内心では興味津々なんだろ」

「へえ……あ、俺ちょっと行つてくる」

晃郎にとつてあまり触れてほしくない話題があつたのと、丁度ノートを返す用事があるのでそう切り出すと、陽太は目を細めた。どことなく険が含まれている。

「一組か」

「ああ」

「雨蓋さんか」

晃郎が黙つて借りたノートを田の前で振ると、陽太は猫じやらしを追つ猫のように田を揺らし、ハツとして拳骨を振り上げる。攻撃を無事に避けた晃郎は爆笑を腹の内で堪えながら「行つてくわ」と席を立つた。

「テメエ、覚えてろよ。…… そつこや雨蓋さんも現場にいたつけ」「アイツも結構、野次馬なんだな」

そう言つ晃郎も興味がある。

瑞代からも詳しく述べを聞いてみようと思ひながらドアから出るとき、「今日、現代社会ないよな」とぼやく声を聞いた。

首を傾げながら一組に行き、教室の後ろに張つてある時間割のプリントを見遣る。確かに今日は現代社会の科目がない。

几帳面な性格なのに珍しく間違えたようだ。

だがそのお陰で刺々しい雰囲気の中登校せずに済んだ。晃郎は瑞代の勘違いに感謝しながら窓側の列、一番前にある瑞代の席にノートを返しに行く。

「あれ、いない」

机まで後五歩という所まで近付いた晃郎は、そこでよひやく瑞代が席に居ない事に気付く。

いつも席に座っているというイメージがあつので居ると思い込んでいた。首を捻つて机を見詰めていると、

「おはよっす。瑞代ならサボってるよ」

「山岸。おはよ。……は？ サボりって？」

振り返った先にはウエーブの掛かった黒髪を横に纏めた、くらくりといした瞳の女子生徒がニヤニヤと笑っている。「残念だね」と呟むように言いつて手を晃郎に向かた。

「返しとく。ところが私もノート見たい」

「じゃあようしへ頼むよ」

「はいはーー」

山岸瑠夏やまきり るかは受け取つたノートで肩を叩きながら自分の席に帰つて行く。晃郎はその動作に深い年季、もとこざば臭さを感じつづ自分も教室に帰つて行くのだった。

恨めしいと漂う物

人は他者との差異を意識的に、あるいは無意識的に探す。そして自分の観点から比較を行い己の立場を認識するのだ。人間はそういう生き物だ。

人気者がいれば逆もまた然り。頭の良い者がいれば、逆もまた然り。

だがそうやって比較をすれば劣る者は出るのは当たり前のことである。それを公に示してしまうと問題になる。よって感情や関係面は学力などと違い順位付けされることはない。しかし余程の鈍感ではない限り皆自分の位置を認識しているのだ。

優劣の中で現れるのは妬みであり憎しみであり、羨望であり目標である。予測できない多大な正負の感情が生み出されていき、人は折り合いをつけながらバランス良く生活をしている。

だが無数にいる人間の中では勿論、逆も有り得るのだ。

そしてそれは正に傾くより負に傾く方が圧倒的に多い。著しく均衡を崩した薄暗い物は時にその人自身を鬼へと変え立て、時には自身を殺す凶器へと変わる。

そんな危険を孕む強い感情だが探そつと思えば其処此処にある。そのように一般的で辺りに散らばっているので、いつからかその感情を媒体とする火が存在するようになつた。

様々な呼び名があるがそれは総じて怪火と括られる。

関わると碌なことが無いので今も昔も、人は全力でその火を忌避しているのだった。

濁つた乳白色の床が真つ直ぐ伸びている。

最近の大掃除でワックスをかけたのだが、生徒や教師に踏みしだかれた廊下は既に艶を無くして汚れている。窓を嵌め込んだ壁は磨かれた状態を保つて不自然に白い。だが窓自体は雨と埃で汚れている。

その窓からは快晴に浮かぶ太陽の光が差し込む。これは明るいと言つより眩しいと言うだけであり、倉庫の中にはいるような廊下の薄暗さを払拭する事は出来ない。

廊下には光を鈍く弾いて舞う埃に時々強い光度が混じつっていた。火だ。

それらは決して落ちることはなく、緩やかに空間を闊歩する。緑や赤、青色をした大小の火は陽の光に負けて薄くなりながらも消えず、時折餅を千切る様に尾を引いて分裂していた。

屋上に続く階段の前に立つ瑞代は凝り固まった肩を回して火を退治して回ったこの午前中を振り返った。

ここまで減らすのに何分掛かった事か。とにかくこれで終わりだと廊下の端にある大窓を開ける。十センチ程開けた時点で強く風が吹きこみ髪が大きく乱れるが、構わず一気に開け放つ。

春の強風が待っていたとばかりに吹き入り、廊下を走り抜け、薄暗い原因となつてゐる者達を蹴散らしていく。

瑞代は「ゴウゴウ」と耳元をなぶる風の鳴き声を聞きながらその光景を眺めていたが、ふと感じた悪寒に左手で顔を庇い、直後の鋭い痛みに一步下がつた。浮いた前髪の先が切断され廊下のゴミの一部となる。下がらなければ額が切れていたどう。

瑞代は左手を庇うように押さえ込み顔を上げて十メートル先にある褐色の旋風^{つむじかぜ}を睨み付ける。すると旋風が圧し潰されて中から子供大のイタチに似た動物が弾かれたように転がり落ちた。何が起こったか分からず顔を左右させるイタチは前脚部分が鎌になつており瑞代の血がべつたり付着している。

鼬は毛を逆立て警戒しているが瑞代を獲物と定めたようでは逃げる

素振りはない。身を屈めて再度襲いかかろうとしてなく迫つていた駒の蹄に強かに踏まれた。

「駒、散らかさないでね」

駒は齧れる物なら何でも食べ栄養に変えている。今回の獲物は何時もより大きいので、その分だけスプラッタな光景が展開されると思い顔を歪めると駒は首を振った。「食べナイ」と言つて脚を退ける。イタチはこれ幸いと身体を起こして逃げようとするが、瑞代はハツとして身を屈めた。と、次の瞬間に弾丸の様な速さでイタチが頭上を横切り、窓枠にぶつかりガラスを割つて空に消えていく。

「やつすぎだつてー！」

退治するにもやつ方といつものがあるだろ？

頭を痛めた直後に案の定、音を聞き付けた生徒達が教室の窓から顔を出し皿を丸くしている。そしてすぐ亀のように首を引っ込んだ。教師に報告しているのだと思つと苦い物が心中に広がり、そして予想通り教室のドアが開き初老の穏やかそうな女性教師が出て來た。

「雨蓋さんじやない。あら、窓が割れているわね」

何ともない風に言つたが内心穏やかではないだろ？と瑞代は察した。

現代文の教師である藤守智子は普段から困つたよつな顔付きであり、瑞代を前にすると更に深く眉尻を下げる。まるで厄介なものを見てしまつたとでも言わんばかりで、今もその顔をして瑞代の居心地を悪くさせた。

瑞代は怪我をした左手を背に回して窓を見る。

「何かが飛んで、ぶつかったみたいですね。今日は風が強いから

嘘は言つていません。智子は納得したようだがやはり困ったよう

頬に手を当てた。

「ううだつたの。怪我はしてない？」

「大丈夫です、けど……」

瑞代は廊下の先を見て思わず「けど」と付け加えて眉を顰める。智子は瑞代の視線を辿つて振り返り「ああ」と合点したがそれきり何の言葉もない。関わりたくないという態度に助成を諦め、肩で風を切つて歩いてくる教師の到着に身構える。

「藤守先生、びつしましたか？ 雨蓋。お前窓を割つたのか

「違います」

「じゃあ誰がやつたんだ」

「強風ですから、誰とも言えませんけど」

教師は声から受けれる印象とは裏腹に神経質な顔立ちをしている。
萩山静治郎はぎやませいじろうという現代社会の教師で生徒を見下すべき生き物だと認識している節がある。勿論生徒達は毛嫌いしており、無論瑞代も嫌いなのだがその強度は遙かに一般生徒を上回る。

全ての始まりは、初めの授業だった。

初回ということで瑞代は他の生徒と同じく真面目に静治郎の話を聞いていたのだが、唐突に「身が入つていらない」と名指しで怒鳴りつけられた。唐突な免罪の晒し上げに声も出ず驚いていると「初回の授業で寝るとは何事だ」と続けて怒られ、流石に反論すると「教師に反抗するな」と立場の強権で弁明すら聞き入れられなかつたのだ。瑞代の何が彼の気に触つたのか分からぬが、どうも憎まれて

いるような気がする。理由は知らない。

それまでどちらかと言えば和やかだったクラスの空気は一瞬にして痛い緊張に満ち、入学当初という生徒が互いに互いを知らない時期だったこともあって瑞代はその後しばらく不真面目な生徒として級友から評価を受ける羽目になる。

授業の回を重ねることに不名誉は薄れ、反比例するように静治郎の悪名は濃くなつていいくのが、その時の反抗心は今でも胸の中に残る。

これによつて瑞代は成績トップを勝ち取り続け、代わりに友情といふ物に対しても斜に構えているので交友関係は極僅かな線しか描けなかつた。

瑞代はその天敵の右肩に火が灯つてゐるのを見つけて見捨てようかどうか束の間悩む。

憑けつぱなしだと段々身体に影響が出る。精神か肉体か、あるいはその両方かもしれない。となればコイツを駆逐する絶好のチャンスではないのか。

「先生、肩に埃が」

「あ？ 痛つ！」

瑞代は憎しみを込めて右肩を叩く。顔を歪めた静治郎はすぐさま怒鳴ろうと口を開ぐが本当に手に残る埃を見せつけられて押し黙り、敵意が裏側にたっぷり籠つた目付きで「悪いな」と呟く。智子は二人の顔を交互に見て、幾分か同情的な視線を瑞代に寄越していたが仲裁に入ろうとはしない。良い人でも悪い人でもないという典型的のような人だ。

「それはそうと、雨蓋。窓を割った経緯を説明しろ」

「聞いてなかつたんですか？ 風ですけど」

「じゃあ何で外側に割れているんだ？」

「私に聞かれても困ります。……怪我したんで保健室に行つても良いですか？」

瑞代は言つつもりのなかつたパックリ割れた傷口を田の前に突き出す。「ぎやあっ」と思いの外静治郎に効果を發揮したようで血色の良かつた顔色が途端に色を無くした。それでも尚行かせまいとしてか嫌味の口を開こうとする腐つた根性は見上げたものだったが、階段の方から瑞代への援護射撃が入る。

「藤守先生。と、萩山先生。お疲れ様です。怪我人ですか？」

「ああ、筧先生」

「あれ、雨蓋さんか。……それ、病院行きのよつな気が」

今まで物に徹していた智子がホツと息を吐いて瑞代に田で合図する。

瑞代は一礼して養護教諭の筧繁春かけじぱはるの手招きに応じる。階段の半ばで少し後ろを覗き見ると神経質そうに眉を怒らせる静治郎と田が合い、睨まれた。駒がすかさず反応して「無礼ナ奴」と尻尾で膝の関節を狙い撃ちしたので静治郎は膝から床に落ちる。

音を聞き付けた繁春は白衣を翻して振り返り、しかし声を掛けるでもなく再び前を向いて進む。薄つらとくまの浮く目を瞬いて見なかつたことにしておいた。あまり静治郎を好きではないのだと瑞代に知れる行動だが本人は気にしていない素振りだった。

「叱るわけではないが、授業中だぞ。あんなところで何をしていたんだ？」

「体調が悪いから保健室に行こつかと思つたんです」

階段を下る最中に問われた言葉に瑞代は嘘を吐く。異変を駆除し

ていたなど気が違つたのかと思われては堪らない。

今日体調不良を訴えた三年生は結構な数いるはずなので自分もこれで通ると思ったが、繁春は「それなら丁度良かつたな」と気に入る笑いを含めた。それ以降は保健室まで一言も言葉を発しなかつたが瑞代は悶々とした内心を持て余す。

しかし二階に下りるとそんな気分はスウッと消えていった。突然綺麗になつた空氣を大きく息を吸い、瑞代は自分も少なからず影響を受けていたのだと想い知る。三階にはまだ濁んだ空氣が漂つていたのでここに来てようやく一心地ついたという感覚だつた。

保健室の前で覧は一旦立ち止まり「先客がいるぞ」と瑞代に告げる。

消毒液の匂いが立ちこめる室内に入ると、パイプ椅子に晃郎と陽太が座つて喋つていた。客というより招かれざる不良だ。

「何してるの、二人とも」

「おう瑞代。ノートありがとな。席にいなかつたからクラスの山岸に」

「あ、雨蓋さん。手！怪我したのかよ」

言葉を遮つた陽太の額には大きなガーゼがくつ付いている。

「月丘くんこそ、頭大丈夫？」

「言ひ方に悪意を感じるぞ雨蓋。月丘の頭は大丈夫だからこつちに来い」

繁春は苦笑しながら瑞代に骨ばつた手を差し出す。瑞代はそこにつき左手を乗せた。

繁春はじつと觀察し感心したように呟く。

「随分綺麗に切れてるな。応急処置だけして病院に送らう」

「近くだから一人でいいです。それで用丘くん、頭どうしたの？」

ヒヨコ色の髪は薄ら赤黒く濁っている部分がある。陽太は少し恥ずかしそうに口を逸らしてガーゼに手を遣つた。

「窓側で雑談してたらいきなり窓が割れてさ。ちょっと破片が掠つてこうなったんだよ。……なんで隣にいたお前は無傷なんだよ」

「田頃の行いだろ。俺田々寺で徳積んでるし」

陽太が声のトーンを変えて真隣に愚痴ると晃郎は涼しげな顔で答える。瑞代はそんな晃郎にスッと口を細めて口を開さした。晃郎は気分を損ねたと思ったらしく慌てて「ウソウソ」と手を振るが、瑞代が不機嫌そうな顔になつたのは違う理由だ。つけていた一つ目鼬が影も形もなくなつている。突然窓が割れたというのは別の鎌鼬だろ？から、それから晃郎を守つたのだろうか。

腑に落ちない部分は沢山あるが瑞代は繁春に促されたので立ち上がる。「付き添う？」と眉を寄せる晃郎に口の端を引き上げた。その心配を嗅ぎ取つて瑞代は軽く返す。

「サボリの理由にしないで」

「バレたか。……そういうやお前さ、午前中の騒ぎ知つてるだろ？」

「……見に行つたから知つてるよ。それがどうかしたの？」

「いや、どんなもんだつたかと思つて。何か变つて陽太から聞いたからさ。……そういやお前のノート取りに帰んなかつたら見れたんだよな俺もぐつ」

晃郎は不自然に呻き身体を丸める。隣の陽太が良い笑顔なのでなにかしたのだろう。

「お大事に」と送りだされた瑞代は廊下に出て溜息を吐く。晃郎の危険に身を突つ込みたがる馬鹿さ加減はどうにかならないものか、

と頭を悩ませながら学校の近くにある整形外科に足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0263u/>

九十九奇譚

2011年11月24日17時54分発行